

言語学

藤岡 克則

言語学の2013年度から2015年度までの研究動向について書くようにとのことであったが、あまりに広範なため、ここでは表現研究に関連深いと思われる、日本における意味論研究の最新情報を中心に、筆者の関心をひいた研究を取り上げたい。

最新の意味論研究の集大成として、2010年に澤田治美氏の編集によって、『ひつじ意味論講座』第1巻が、ひつじ書房より刊行され、その後、2011年に第5巻が、2012年に第2巻・第4巻・第6巻がそれぞれ刊行された。続く2014年には第3巻、そして2015年に第7巻が刊行されたことにより、本講座全集が完成したことになる。本講座は、ひつじ書房創立20周年を記念して企画されたものであり、82名の執筆者による研究論文が収められ、日本における現代意味論研究の全貌に接することができる貴重な全集となっている。

全7巻のタイトルは以下の通りである。
第1巻『語・文と文法カテゴリーの意味』
第2巻『構文と意味』
第3巻『モダリティⅠ：理論と方法』
第4巻『モダリティⅡ：事例研究』
第5巻『主観性と主体性』
第6巻『意味とコンテクスト』
第7巻『意味の社会性』

本全集の意味論に対する基本的な研究方法は、「意味の同心円的なレベル」を設定し、「命題の意味」を核とし、その周りに「モダリティの意味」、「発話場面的

意味」が核を囲み、最も外側の円として「社会・文化的意味」が存在するというアプローチである。

今回は、2014年に出版された第3巻『モダリティⅠ：理論と方法』、及び、2015年出版の第7巻『意味の社会性』に焦点を絞って言及したい。（この2冊が、今回の参照期間に刊行された。）

近年、言語事象としてのモダリティ研究が活発に行われてはいるものの、モダリティそのものの定義は、研究者によって異なっているのが現状である。また、ギリシャ哲学にまで遡ることができる西洋言語学におけるモダリティの捉え方と、時枝誠記の「詞」と「辞」の区別や、さらには江戸時代の国学にも由来する「事柄に対する話し手の主観的な判断や心的態度」を担うモダリティ概念という日本語学における相違も含め、『モダリティⅠ：理論と方法』において、今日までに提示されたモダリティという概念や定義をめぐる、分かりやすく解説されている。また、モダリティに関わる事象自体の広がりからも、モダリティ研究が今後さらに発展していくであろうという期待を抱くことができる一冊である。

本全集の最後を飾る第7巻は、『意味の社会性』と題され、呼称・ジェンダー・コミュニケーションといった従来からの意味論研究に留まらず、医療・司法・災害・スポーツ・翻訳・国語などの広い視野から意味の社会性に光を当てた斬新な研究アプローチであり、日本の意味論研究の新たな方向性を示唆する興味深い研究が扱われており、今後の研究発展が大いに期待される分野である。

（大阪産業大学）